

日本學報 別刷本

第87輯・pp. 69~80

音声から書字への轉換とその聴解への影響

— 英語から日本語に借用された外来語の韓国人日本語学習者による書き取りを例に —

早川杏子・玉岡賀津雄・金秀眞

asiaicot@yahoo.co.jp・ktamaoka@lang.nagoya-u.ac.jp・jinhiroshima@yahoo.co.kr



韓國日本學會

2011. 5

<http://kaja.or.kr>

音声から書字への転換とその聴解への影響

— 英語から日本語に借用された外来語の韓国人日本語学習者による書き取りを例に —

早川杏子*・玉岡賀津雄**・金秀眞***

asiaicot@yahoo.co.jp・ktamaoka@lang.nagoya-u.ac.jp・jinhiroshima@yahoo.co.kr

<要 旨>

日本語の外来語は、ほとんどが英語からの借用である。英語をL2とし、韓国語を母語(L1)とする日本語(L3)学習者にとって、外来語を多く含むテキストの聴解には英語(L2)の語彙知識が影響していると考えられる。しかし、単語レベルにおいてL2の英語とL3の日本語には音韻構造に大きな違いがある。そこで、本研究では、第3言語(L3)としての学習目標言語に借用された単語の音声から第2言語(L2)の書字へ適切に対応させる能力が、テキストレベルの聴解にどのように影響するかを検討した。第1に、音声と書字の対応関係に関する能力が外来語を多く含むテキストの聴解に影響する因果関係モデルを想定した。その結果、英語の語彙知識は英語とカタカナの書字能力を介して日本語の語彙知識に影響し、それがさらに聴解能力に影響するという因果関係が見出された。第2に、聴解能力を基準として英語とカタカナでの表記の正答率に対してクラス分析を行ったところ、4つの分類が見出された。さらに分類された語の誤答のパターンから、L3外来語の表記には、L2だけではなく、L1の音韻・書字知識による影響も見られた。

キーワード：外来語、語彙知識、テキストの理解、韓国人日本語学習者

1. 研究の目的

第2言語(L2)あるいは第3言語(L3)の聴解は、語彙知識がテキスト理解の大きな柱になっている。語彙の量とテキスト理解の関係について、英語の読解においては、テキスト中の95%の既知語率(Liu&Nation,1985;Laufer,1989,1992;Nation,2001)がなければ内容理解を促進することができないという。日本語でも、読解では96%(小森・三國・近藤,2004)、聴解テキストの理解に必要な既知語率の閾値はおおよそ93%(三國・小森・近藤,2005)であるとされ、外国語におけるテキスト理解には、語彙知識が非常に重要であることがわかる。日本語における語種の中でも、外来語は、1956年に出版された雑誌の語彙調査(国立国語研究所,1964)と1994年出版の雑誌の語彙調査(国立国語研究所,2005)を比較すると、9.8%から30.7%と38年間で3倍にも使用率が増加している。日本を取り巻く社会情勢から考えても、今後も外来語は増え続けていくと予想され、日本語学習者にとって外来語の知識は、和語や漢語と同程度にテキスト理解に重要な語彙知識であるといえる。一方、韓国語(L1)でも英語からの借用語を英語の音に近い形で取り込み、使用している。韓国人日本語学習者がL3の外来語を学習する時、外来語が多く含まれたテキストの聴解において、L2としての英語やL1の語彙知識がどのように影響するのかについてテキストレベル、語彙レベルで見ていく必要がある。

* 名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程

** 名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授

*** 韓国国際大学校観光日語学科講師

そこで本研究では、第1に外来語の語彙知識には、英語の語彙知識が背景知識として存在するとし、それが外来語が多く含まれたテキストと理解に対してどのような因果関係の流れを作っているのかについて検討する。第2に、音声提示された外来語の書き取りに、L2やL1の語彙知識がどのように影響しているのかについて検討する。

2. 語彙の下位知識としての音韻・書字

本研究で示す語彙知識とは、各単語における音韻(phonology)、書字(orthography)、意味(semantic)情報が貯蔵されている心的辞書(mental lexicon)を想定している。例えば、コンピュータ分野の用語で、removable diskという語がある。コンピュータのような固定型のディスクドライブから取り外し、持ち運びが可能な小型の補助記憶装置である。この語がremove(移動)able(可能な)disk(円盤型の記憶媒体)という意味の形態素によって構成されているという知識があれば、小さな意味単位をつなぎあわせれば一つの音の固まりになるので、それを文字に対応させていけばよい。英語の語彙知識は、そうした音韻、書字、意味の3つの表象(representation)という下位知識が相互に影響しながら構成されていると考えることができる。もちろん日本語の語彙も同じ過程で処理が行われていると考えられる。けれども、外来語表記のカタカナは音のみを表し、原語の音に従って表記されるため、書字そのものが長くなりがちで、和語や漢語よりも拍数の多い音韻と書字に記憶の負担をかけることになる。だが、英語の語彙知識が背景にあり、英語の音韻・書字知識を用いて、それらをカタカナの書字に転換させることができれば、外来語の語彙知識を効率的に積み上げていくことができると考えられる。

3. 外来語における音韻と書字の対応関係

英語由来の語である場合、各言語に取り込まれる際は英語の音の基本となる。目標学習言語である日本語、原語の英語、母語である韓国語はそれぞれ全く異なった書字を持つが、借用が音を基本としているので、原則的には、音声的に提示された外来語については理解可能であると考えられる。

ところが、この予想とは反対に、日本語学習者を対象にカタカナ語学習の意識調査を行った陣内(2008)では、韓国語・朝鮮語話者の70%近くが「原語や母語の借用語との発音の違い」に難しさを感じると答えている。日本語の音韻構造は、母音の数が5つと少なく、撥音(N)と促音(Q)の場合のみCVC(Cは子音、Vは母音; 厳密には、CVN, CVQ)の音節(シラブル)構造を取るものの、CVI)を基本単位とする拍(モーラ)構造である。英語の音韻構造が基本的に閉音節(closed syllable)であることと対照的である(国立国語研究所,1990:23)。そのため、日本語の音韻体系に合わせて開音節(open syllable)化されCV構造を取る外来語は、原語の音とは異なった発音となることが多い。また、韓国語

1) ここでは日本語の音韻構造と単純化している。半母音のSはSVIになるが、これはCVIに準ずると考える。また、母音だけで拍を作る場合にはφVと考え、やはりφがCに準ずると考える。結果として、CVを日本語の拍の基本構造と想定した。

では10の基本母音が存在する点、音節末の子音表記「パッチム」(終声)がある点で、より英語に近い音で表記が可能となることから、韓国人日本語学習者にとっては、日本語音韻体系化された借用語の開音節化が外来語の聞き取りを困難とさせる一つの大きな要因であると考えられる。

L3の語彙に先立ち、L2の語彙が既に学習されているならば、学習者の心的辞書には多くの外来語の原語の英語の書字と音韻情報が記憶されているはずである。外来語を表記化する場合、心的辞書に記憶された英語の音韻を参照し、日本語の書字体系に対応させていくというのがまず一つの流れであると考えられる。また、L1においてもL2からの借用語が使用されているものについては、使用頻度の高さを考えるとL1の音韻体系の影響を大きく受けることが推測される。このことから、外来語の表記化にはL1の借用語の音韻情報も参照されているという因果関係も想定することができよう。言い換えれば、外来語の書き取りにも、L1ならびにL2の両言語の語彙情報が影響すると考えられる。

村上(1989)は、韓国人日本語学習者に英単語とその発音記号を書いた調査紙に、その英単語の外来語を書き取らせるテストを行った。調査で用いた語は、すでに日本語で学習したことのある語に限定され、なおかつ韓国語でもある程度使用されている語であった。この書き取り調査の結果、CVCの語、例えばpetやsongの表記の誤りとして、それぞれ「ペツ」(ペット)、「ソソ」(ソング)のような語末の子音を脱落させる誤りが見られたことが報告されている。CVC構造の語は、英語と韓国語には存在するが、CVを基本構造とする日本語の語彙には存在しないため、語末の子音の表記を日本語の書字に対応させることが難しいのであろう。この事例は、やはりL3の書き取りにおいてもL1とL2の双方の音韻構造からの影響を受けるということを示している。しかし、学習済みの語ならば、その語の書字はすでに心的辞書内に記憶されており、書き取りで表れた誤答が本当にL1からの音の影響なのか、それとも単に外来語の書字を正確に記憶していなかっただけなのかは判断できない。また、印刷されたスペルと発音記号を見てカタカナを表記する条件は、厳密にはL2の音声的なインプットから類推して回答したとは言えないであろう。韓国人日本語学習者の外来語の音韻と書字の対応関係を明らかにするには、L1、L2の語彙情報をどう利用し、L3の書字に対応させるのか、書字情報のない未習の語を提示すべきであり、また、音声的なインプットによる書き取りを行い、そこで見られる特徴について詳しく検討する必要がある。

4. 外来語を多く含むテキストの聴解モデル

以上の背景から、外来語の知識は、背景に英語の語彙知識が重要ではあるが、そのみでは音声提示された外来語に対しては直接の理解には繋がらず、英語と日本語の音韻構造の違いを超えて音韻と書字を対応させる能力が外来語を多く含むテキストの聴解に対して影響を及ぼすと考えられる。そこで、そのようなテキストの聴解には、外来語の知識が直接影響するが、その背景には英語の語彙知識からその下位知識としての英語の書字知識へ、英語の書字知識からカタカナの書字能力を介して日本語の語彙知識へ影響するという一連の因果関係を想定したモデルを描き、それについて検討することにする。

5. 研究の方法

5.1. 被験者

調査は2008年11月、韓国のA大学で行った。被験者は日本語を主専攻とする1年生から4年生までの大学生80名であった。日本語の平均学習期間が3年5ヶ月(標準偏差1年6ヶ月)、英語の平均学習期間が6年8ヶ月(標準偏差2年4ヶ月)であった。

5.2. 観測変数の設定

パス解析によるモデル検討のために、「英語の書字知識」、「カタカナの書字能力」、「英語の語彙知識」、「日本語の語彙知識」、「外来語の多く含まれるテキストの聴解」の5種類の観測変数を設けた。前者2つの書字の測定は音声提示された外来語を表記させるディクテーション方式である。後者3つのテスト問題は、4つの選択肢から正しい答えを一つ選ぶ多肢選択方式であった。

5.2.1. 英語の書字知識とカタカナの書字能力の測定

5.2.1.1 調査対象語

対象語の選定にあたっては、外来語が比較的多く使用される分野である、コンピュータ、スポーツ、ファッション、音楽の4つのジャンルから各10語ずつ計40語選定した。選定にあたり、英語を原語とし和製英語ではない外来語で、初級レベルの日本語教科書²⁾では扱われておらず、外国語環境で日本語を学習する被験者にとっては未習である可能性が高いものを条件とした。未習語にしたのは、純粋に音からの書字転換能力を観察するためである。対象語の中には、韓国語でも借用語として使用されているものもあったが、あまり使用されていないものも含まれていた。これらの調査対象語を日本語母語話者が発音し、それを音声分析ソフトPraatを使ってWAV形式で保存してCDを作成した。各外来語提示の間隔は20秒で、無音インターバルとなるように編集した。

5.2.1.2. 調査手続き

調査にあたり、音声提示された外来語をカタカナで表記し、それに対応する原語をアルファベットで記入するよう被験者に教示した。対象語の提示は一回のみとし、書き取りの制限時間は20秒とした。

5.2.1.3. 採点法

カタカナ／英語書き取りテストの採点方法は、1問の正答につき、1点とした。1ヶ所でも間違っている場合は0点とし、部分点は与えなかった。

2) 日本、韓国で比較的広く使用されている『みんなの日本語』初級Ⅰ、Ⅱ(スリーエーネットワーク)を参照した。

5.2.2. 外来語を多く含むテキストの聴解の測定

テキストのトピックは、対象語の選定と同様、コンピュータ、スポーツ、ファッション、音楽の4つのジャンルで構成した。各ジャンルにつき4問、計16問出題した。なお、テキストは200字程度になるよう調整した。

5.2.3. 英語の語彙知識の測定

英語の語彙知識を測るためのテストには、「実用英語技能検定」³⁾の過去問題から語彙の穴埋め多肢選択問題を抜粋して編集、使用した。準1級レベルを5問、2級レベルを20問、準2級レベルを5問選択し、計30問出題した。

5.2.4. 日本語の語彙知識の測定

日本語の語彙知識の測定には、宮岡・玉岡・酒井 (印刷中)の語彙テストを使用した。名詞、形容詞、動詞、機能語に関する問題がそれぞれ12問ずつあり、計48問で構成されていた。設問中の文法および語彙は、すべて『日本語能力試験出題基準改訂版』(2002)1級から4級に掲載されている語であった。

6. 研究の結果

6.1. 各尺度の基本的検討

6.1.1. 平均、標準偏差

5つの観測変数の平均と標準偏差は、表1に示したとおりである。

表1 5つの観測変数(テスト)の平均、標準偏差

5つの観測変数	問題数 (満点)	合計(n=80)	
		平均	標準偏差
英語の書字知識	40	9.41	4.97
カタカナの書字能力	40	9.78	6.87
日本語の語彙知識	48	30.98	7.53
英語の語彙知識	30	14.30	5.07
外来語を多く含むテキストの聴解	16	10.41	2.91

6.1.2. 相関係数

5種類の観測変数の平均、標準偏差およびピアソンの相関係数を表2に示した。カタカナの書字能力は英語の語彙知識を除くすべての観測変数と有意な相関があった。英語の書字知識は、日本語の

3) 財団法人日本英語検定協会主催による英語能力測定試験。1級、準1級、2級、準2級、3級のレベルに分かれており、1級が最も高い水準となっている。

語彙知識を除くすべての観測変数と有意な相関があった。外来語を多く含むテキストの聴解については、カタカナの書字能力と英語の書字知識、さらに日本語の語彙知識との間とは有意な相関が見られたが、英語の語彙知識とは相関がなかった。英語の語彙知識は、英語の書字能力のみ有意な相関であった。

6.1.3. 信頼度係数

各観測変数のテスト問題における信頼度の検討には、Cronbackの α 係数を使用した。算出した α 係数は表2の通りである。英語の書字知識の40問についての α 係数は0.807、カタカナの書字能力40問についての α 係数が0.891、日本語の語彙知識の48問についての α 係数もまた、0.868といずれも高い信頼性が得られた。英語の語彙知識についての α 係数は0.769であり、こちらも比較的高い信頼性のテストであったといえる。外来語を多く含むテキストの聴解については、 α 係数は0.650とやや低かったが、問題数が16問と少なかつたことを考慮すると、ある程度の信頼性が確保できたといえよう。

表2 観測変数間の相関係数および信頼度係数

観測変数	信頼度係数	1	2	3	4	5
1 英語の書字知識	$\alpha=0.807$	—				
2 カタカナの書字能力	$\alpha=0.891$	0.42 **	—			
3 日本語の語彙知識	$\alpha=0.868$	0.04	0.51 **	—		
4 英語の語彙知識	$\alpha=0.769$	0.53 **	0.06	-0.14	—	
5 外来語を多く含むテキストの聴解	$\alpha=0.650$	0.24 *	0.41 **	0.61 **	-0.15	—

注1: * $p<.05$. ** $p<.01$. α はクロンバックの α 信頼度係数を示す。

注2: 相関係数は、AMOS 18.0で算出した。

6.1.4. 外来語が多く含まれたテキストの聴解モデルの検討

4.で想定したL3の外来語が多く含まれたテキストの聴解に影響する因果関係のモデルを検討するため、SPSS社のAmos18.0を用いて英語の書字知識、カタカナの書字能力、日本語の語彙知識、英語の語彙知識、外来語を多く含むテキストの聴解の5つの観測変数のパス解析を行った。

6.2. パス解析による因果関係の検討

分析の結果は図1に示した。パス解析の結果、英語の語彙知識から英語の書字知識に0.1%水準において有意な因果関係が見られた(英語の語彙知識から英語の書字知識への影響、 $\beta=.53$, $p<.001$)。また、英語の書字知識からカタカナの書字能力に0.1%水準において有意な因果関係が見られ(英語の書字知識からカタカナの書字能力への影響、 $\beta=.41$, $p<.001$)、さらにカタカナの書字能力から日本語の語彙知識に0.1%水準の有意な因果関係が見られた(カタカナの書字能力から日本語の語彙知識への影響、 $\beta=.51$, $p<.001$)。日本語の語彙知識から外来語を多く含むテキストの聴解にも0.1%水準において有意な因果関係が見られた(日本語の語彙知識から外来語を多く含むテキストの聴解への影響、 $\beta=.61$, $p<.001$)。

以上の結果から、外来語を音的に提示した時、L2の英語の書字知識はL3の日本語のカタカナでの書字能力に影響し、そうした語彙レベルの音から書字への転換能力が外来語の語彙知識、L3の外来語を多く含んだテキストの聴解に影響することが示された。

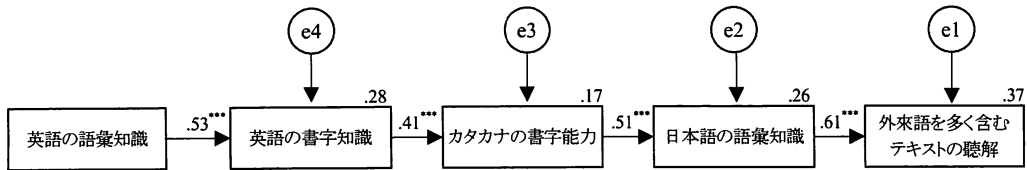


図1 英語の語彙知識、英語の書字知識、カタカナの書字能力が日本語の語彙知識を介して、テキスト理解に貢献するモデル

7. クラスタ分析による外来語の分類

7.1. 表記された外来語の検討

聴解に対する全体の語彙知識の流れは以上の検討により明らかになったが、音声提示された未知の外来語の書字表記に関する背景言語知識の影響については、因果関係を検討するパス解析の手法では見ることができない。そこで、クラスタ分析を行い、カタカナとアルファベットで表記された外来語にはどんなパターンが示されるか、分類された語の傾向を詳しく検討することにした。

7.2 クラスタ分析

7.2.1. 相関係数と *t* 検定

調査対象とした外来語40語の相関について、英語のアルファベット(M=34.73%,SD=27.11%)と日本語のカタカナ(M=26.00%,SD=18.10%)での書き取りについてピアソンの相関係数を算出したところ、 $r=.615(p<.001)$ と高かった。また、両者の正答率の差を検討するために、対応のあるサンプルの *t* 検定

表3 クラスタ分析で分類された I~IVの外来語の語数、平均正答率

分類	外来語 語数	カタカナ表記		英語表記	
		平均(%)	標準偏差	平均(%)	標準偏差
I	16	13.8	9.1	9.4	10.1
II	6	42.9	9.8	48.1	21.2
III	5	49.3	17.0	77.5	10.4
IV	13	24.0	13.9	43.0	43.0

を行った。その結果、両者の間には有意な差が見られ $t(39)=2.526, p<.05$], 音声提示した外来語はカタカナで表記するよりも、英語のアルファベットで表記するほうが正確に書けていることがわかった。

7.3. クラスタ分析の結果と検討

日本語の聴解能力を基準に、カタカナ書き取りと英語の書き取りの正答率(正答数を被験者数で割った数値)を使って、調査対象語40語を階層クラスタ分析により分類した。なお、クラスタ間の距離にはウォード法を使用し、両書き取りの正答率は平方ユークリッド距離を用いて測定した。その結果のデンドログラムを図2に示した。クラスタ分析の結果、7ポイントを基準にすると、4つの分類が見出された。このクラスタ分析で得られた4つの分類が適切なものであるかを、判別分析によって確認した。これら4つの分類について、それぞれ1から4の値を与え、正答率の1つの変数で1から4の分類を識別する正準判別分析を行った結果、第1正準判別関数では正準相関が0.960(固有値が11.631, 分散の94.0%を説明, Wilksのラムダは0.045, $p<.001$)、第2正準判別関数では正準相関が0.652(固有値が0.740, 分散6.0%の説明, Wilksのラムダは0.575, $p<.001$)であり、いずれも有意であった。また、これら1つの正準判別関数で、4つのクラスタを分類した場合の的中率を交差妥当化で検討した結果、100%が適切に分類されており、クラスタ分析の結果を支持していた。したがって、4つのクラスタは意味のある分類であると考えられる。クラスタによる語の分類は図2の通りである。以下、分類された語の特徴について詳細に記述する。

7.3.1. 分類Ⅲに属する外来語の特徴 (5語)

分類Ⅲは、4分類中最も両書き取りの正答率が高いグループである。アルファベットでの書き取りのほうがカタカナでの書き取りの正答率よりも高い。おそらく、world, artなど、日常的になじみのある語が含まれていたのがアルファベットの書き取りの正確さに繋がったと思われる。一方、英語ではなじみがある語とはいえ、カタカナでの書き取りでは、「ワールドカップ」を「ワルドカップ」, 「レコーディング」を「レコディング」というように、長音を脱落させる誤りが顕著に見られた。この傾向は、分類Ⅲの語に限らず全ての外来語の表記に対して見られたことから、韓国人日本語学習者にとって長音は知覚そのものが困難なために書字へ反映されず、その結果表記の正確さに影響が出たのだと考えられる。長音の知覚の困難さを示す例として、村上(1989)では、「アワー」を「アーク」のように、「英語の発音記号からいって長音になるべきはずの無いところに(長音を:筆者補足)使ってしまう」(村上,1989:8)事例が報告されている。本研究でも「イブニングドレス」のような長音を含まない語に「イブニングドレース」といった長音を添加してしまう誤りがあり、村上(1989)で報告された事例と同様の誤りのパターンが見られた。

日本語には存在しない英語の音素が含まれる外来語の場合、その発音は日本語で似た発音で代替される。[r](以下、音声表記は[]を使用)日本語でははじき音[r]として音声化されるが、韓国人日本語学習者の英語の書き取りでは、recordingをleccordingとした回答はなかった。また、唇歯摩擦音

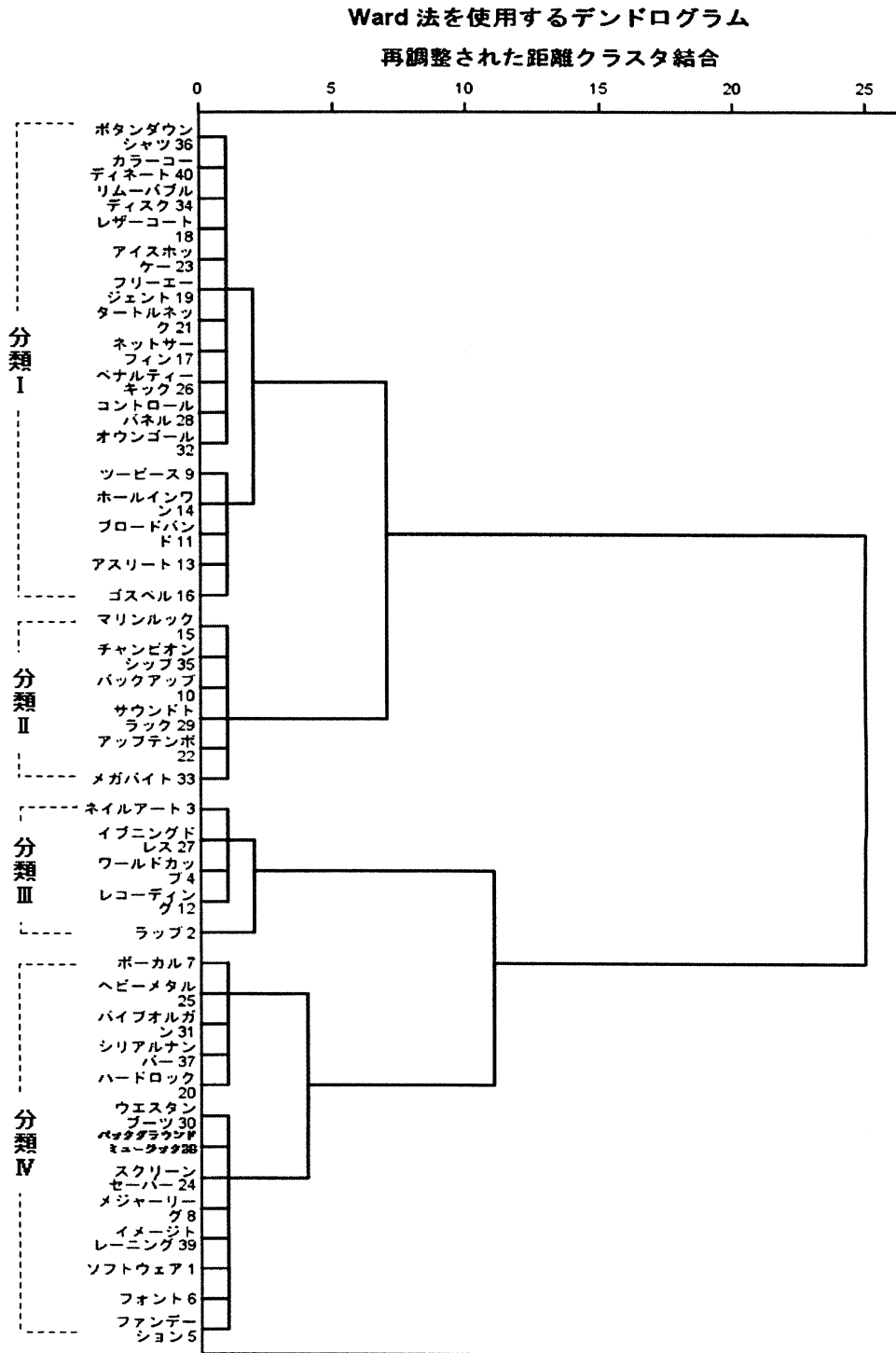


図2 英語スペルのカタカナの書き取りの正答率により
クラスタ分析で分類した外来語40語のデンドログラム

である[v]も日本語では両唇破裂音[b]に代替されて音声化されるが、この発音も”v”という正しい英語のスペルに書字転換されていた。このように韓国人日本語学習者は、日本語の英語から借用された外来語から英語のスペルと音声および書字の違いを超えて正しく英語のスペルで表記できていた。英語の語彙知識があれば、借用語として音韻的に変えられたL3の日本語の外来語からでも、L2の英語の正しい書字に転換させることができることが分かる。しかし、L3の日本語で弁別困難な音声の特徴が、外来語の原語である英語に含まれている場合には、それらの影響を強く受けて、L3である日本語のカタカナでの表記の正確さが落ちてしまうと考えられる。

7.3.2. 分類Ⅳに属する外来語の特徴 (13語)

分類Ⅳも英語の正答率のほうが高いが、分類Ⅲに比べ両書き取りの平均正答率は全体的に下がる。これは、「イメージトレーニング」、「ハードロック」などのように、1つの語の中で特殊拍である長音(R)と促音(Q)の2種類を含む語が2つと、長音を2つ含む語が3つあったことが理由として考えられる。長音と促音については、日本語の基本拍のCVと組み合わせられて、CVR(CV+Rの2拍で、1音節)あるいはCVQ(CV+Qの2拍で、1音節)の音節の単位になるので、音節を基本とする韓国語で認知されやすそうに思える。しかし、韓国語には、音節から独立した長音と促音という特殊拍が存在しないので、これらの音を弁別するのが難しいようである。1語中に1つの特殊拍が含まれるだけでも知覚が難しいのに、1つの単語の中にそれらが2つ以上ある場合は、さらに知覚するのが難しくなるようである。

さらにこの分類では、カタカナの外来語の[f]の音を、英語の[p]に転換させた誤りのパターンが、日本語のカタカナと英語のアルファベットの両方に見られた。提示した外来語の中の、ワープロで使われる語である「フォント」やメイク用品として使われる「ファンデーション」という語は、英語のスペルではそれぞれfont, foundationと書くが、英語のアルファベットではpont, poundation, 日本語のカタカナでの書き取りでは「ポント」、「パウンデーション」というように、[f]を[p]に置き換えた誤りが多く見られた。英語のfontを聞いて「ポント」と書き誤ることは、日本語母語話者にはまず見られない。一方、韓国語では、これまで[f]と[p]の音声的な境界は比較的緩かったようである⁴⁾。そのため、L1の韓国語からL2の英語あるいはL3の日本語への音韻的な負の干渉が、[f]と[p]の誤りの原因ではないかと思われる。

7.3.3. 分類Ⅱに属する外来語の特徴 (6語)

分類Ⅱは、カタカナとアルファベットの書き取りの平均正答率が同程度であったグループである。分類Ⅲ、Ⅳでは特殊拍の表記の困難さがカタカナ表記の正確さに大きく影響し、正答率が下がる傾向が見られたが、このグループでは6語中4語(「マリンルック」、「チャンピオンシップ」、「サウンドトラック」、「アップテンポ」)が促音を1つ、1語が促音を2つ(「バックアップ」)含んでいる。

4) 両唇摩擦音/f/に対し/f/あるいはp/で発音するかは、韓国語では現在のところゆれがあるようである。

促音は特殊拍で知覚の難しい音の単位ではあるが、韓国語では長音ほどにはカタカナでの書字化が困難ではないと思われる。この背景には「パッチム」(終声)の表記法の知識が関与している可能性がある。促音自体は韓国人学習者にとって知覚が難しいため、ハングル表記された英語の借用語で、「ㄱ」, 「ㅇ」等の書字を用いている語の場合、L1の書字知識を利用して、L3外来語の表記に[k],[p]の後続子音をとるもの(上記の例で二重線を引いたもの)は、その直前に促音「ッ」を置くという方略を使っているのではないだろうか。

7.3.4. 分類Ⅰに属する外来語の特徴 (16語)

分類Ⅰは両書き取りにおいて、正答率の最も低いグループである。このグループに分類された語には、「レザーコート」, 「オウンゴール」, 「アスリート」などのように、韓国語では漢語との複合語として表記する語(それぞれ韓国語で「皮コート」, 「自殺ゴール」, 「スポーツ選手」)が5語含まれていた。また、「ネットサーフィン」は、韓国では「ウェブサーフィン」のほうが一般的に使用されているためか、surfingの音からnetと意味関係が通るshoppingを想起し、アルファベットの書き取りではnet shopping, internet shoppingと書いた誤りが見られた。これらの外来語は、英語そのものが韓国人学習者にとってなじみがなかったためにアルファベットでの書き取りの正答率が下がったのだと思われる。同義の借用語が韓国語と日本語において異なる語の場合は、聴取した語の音を手がかりに、既知語内(L2)の似ている音韻の語を対応させ、類推していることが見て取れる例である。

もう一つの特徴として、分類Ⅱ～Ⅳと異なり、分類Ⅰでは、日本語のカタカナでの書き取りの方が英語のアルファベットでの書き取りよりも正確であったことがある。例えば、「カラーコーディネート」(color coordinate)や、「ブロードバンド」(broadband)などである。これはおそらく、音声提示された外来語の原語が想起できなかったために、聴取した音声をそのままカタカナの書字に対応させたことによる結果であると思われる。英語は書字規則が複雑なので、書字の想起ができないと正確なスペルを書くのは難しい。それに対して、日本語のカタカナでの書き取りでは、音と文字の対応関係が単純であるので、結果としてカタカナでの正答率の方が英語のスペルよりも若干上がったのではないかとと思われる。また、「アイスホッケー」, 「ゴスペル」などの語は、韓国語において比較的英語に近い母音で表記し、使用されている(ice hocky 「아이스하키」, gospel 「갠스펠」)。そのため英語と韓国における借用語、日本語の外来語の発音との間に大きな隔たりがある語は、L2およびL1に存在する語彙の音韻知識をL3に転用することができず、聴き取った音をそのまま書き取り、音と文字を対応させることによって結果的に正答となったのだと推察される。

8. 結論

本研究では、まず、韓国人日本語学習者にとって、外来語の多いテキストの聴解には英語の語彙知識がどのように影響するかについてその下位知識を想定してパス解析を行い、因果関係を検討し

た。その結果、英語の語彙知識は日本語の語彙知識の下位知識であるカタカナでの書字能力に対し間接的に影響するが、日本語の聴解には直接の影響はないことがわかった。

次に、音声提示された未知の外来語の英語のアルファベットでの書き取りと日本語のカタカナでの書き取りとの間にはどのような傾向が見られるのか、クラスタ分析を行った。分析の結果、4つの分類が見出され、L3日本語で音声提示された未知の外来語のカタカナでの表記の正確さは、原語であるL2英語のアルファベットでの表記の正確さと関連していることが示された。クラスタ化された分類の語の背景には、L2英語に対するなじみ度、韓国人日本語学習者にとって弁別の難しい特殊拍の知覚と書字の対応が関係していると考えられる。さらに誤答のパターンから、L3の表記だけでなくL2の表記にも、L1からの音韻的あるいは書字的な転移による誤答が見られた。

最後に、外来語の多いテキストの聴解は、日本語に借用された外来語の音声から英語の音韻を対応させる語彙レベルでの能力とともに、語彙知識以外の要因もまた考慮する必要がある。これについては今後の課題としたい。

◀ 参考文献 ▶

- 国立国語研究所(1964)『現代雑誌九十種の用語用例 第3分冊 分析』秀英出版。
 国立国語研究所(1990)『外来語の形成とその教育』(日本語教育指導参考書16),大蔵省印刷局。
 国立国語研究所(2005)『現代雑誌の語彙調査—1994年発行70誌』秀英出版。
 小森和子・三國純子・近藤安月子(2004)「文章理解を促進する語彙知識の量的側面—既知語率の閾値探索の試み—」『日本語教育』120, 日本語教育学会, p83-92。
 陣内正敬(2008)「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』11, 関西学院大学, p47-60。
 日本国際教育協会・国際交流基金(2002)『日本語能力試験出題基準改訂版』凡人社。
 三國純子・小森和子・近藤安月子(2005)「聴解における語彙知識の量的側面が内容理解に及ぼす影響—読解との比較から—」『日本語教育』125, 日本語教育学会, p76-85。
 宮岡弥生・玉岡賀津雄・酒井弘(印刷中)「日本語語彙テストの開発と信頼性—中国語を母語とする日本語学習者のデータによるテスト評価」『広島経済大学研究論集』34(1)。
 村上治美(1989)「韓国人学習者の日本語の外来語表記」『東海大学紀要 留学生教育センター』9, p 1-12。
 Laufer, B. (1989) What Percentage of Text-lexis is Essential for Comprehension? in Lauren, C. & Nordman, M. (Eds.) *Special Language: From Humans Thinking to Thinking Machines*, Multilingual Matters, p316-323.
 Laufer, B. (1992) How Much Lexis is Necessary for Reading Comprehension? in Arnaud, P.J.L. & Bejoint, H. (Eds.), *Vocabulary and Applied Linguistics*, Macmillan, p126-132.
 Liu, Na & Nation, I.S.P. (1985) Factors Affecting Guessing Vocabulary in Context. *RELC Journal*, 16, p3-42.
 Nation, I.S.P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge University Press.

- 투 고 : 2011. 2. 28.
- 심 사 : 2011. 3. 12.
- 심사완료 : 2011. 4. 16.